慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	世界で最初の社会学的実験室
Sub Title	
Author	Zueblin, Charles(Takaoka, Fumiaki) 高岡, 文章
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2002
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.55 (2002.) ,p.95- 102
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	翻訳
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000055-0095

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

世界で最初の社会学的実験室

チャールズ・ズウェブリン
Charles Zueblin
高　岡　文　章*訳
Fumiaki Takaoka

エジンバラの旧市街は，丘の上に位置している。氷河の働きによってできた二つの深い溝にはさまれた稜線づたいに旧市街のメインストリートが走り，エジンバラ城と宮殿を結んでいる。町が稜線づたいにひらけているのは，稜線の西端にある切り立った岸壁に城がたっているからである。高台の城からホリールード宮殿 (Holyrood Palace) へと下る大通りは，幾多の歴史的ページェントの舞台となってきた。エジンバラほど歴史を豊かに連想させる都市は西ヨーロッパにはない。にもかかわらずエジンバラの町よりもその地形の方が注目を集めており，実際，町はその地形に大きく規定されている。

ゲデス教授は，物理的な性質の恒久性に言及するなかで「先史の原生時代に決められたことを，議会が作った条例で変更することはできない」と述べている。氷河期に切り開かれたエジンバラの運命も同様に，人間の手によって好転したり歪められたりすることはあっても，完全に消し去られたりはしないだろう。岸壁にそびえ立つ城塞から大通りを下ってソールズベリー・グレイグ (Salisbury Crags) のふもとののどかな谷にある宮殿にいたるまでの道のりには，この町の文明化の歴史が刻み込まれている。

「かくして都市は育まれ……
そう，帝国の都市として
並居る五百もの街をしたがえて……
街路をうねらせる険しい丘のかたわらに
都市は塔を抱く
あたかも芸術や，悠久なる自然の荘厳さの中心であることを
誇示するかのように」

大通りを城の近くまで進むと旧市街と新市街を共に見渡せる地点があり，そこからはエジンバラの歴史のみならず文明化そのものの歴史を読み取ることができる。近代的な社会学調査と社会活動の一人の先駆者が，実際にこの場所を活動の場として選んだ。

旧市街の中心を走る大動脈に沿って歩き，クロウスと呼ばれる狭い小路を通過し薄汚れた路地の一つへ足を踏み入れると，古い通り沿いに並ぶ高層の建物にたどり着く。暗い階段を手探りで三段登ればそこはゲデス教授夫妻の住居である。ドアをノックして美しく装飾された部屋に入り，階段を何とか登り

*（慶應義塾大学大学院博士課程）

きり窓際まで行くと，驚きと魅力に満ちた信じられないような景色を目にすることができる。建物の南側を三階ぶん登ると，北側から見た八階に出てしまった。それほどこの建物が立っている丘の傾斜は険しいのである。不思議な魅力をもつ窓からは，目の前にプリンスズ・ガーデンズ (Princes Gardens) が，高名なプリンスズ・ストリート (Princes Street) の壮麗さに縁取られて，フォース湾へと至る斜面に横たわるのが見える。このフォース湾の冷たく青い水の向こう側には，スコットランドの誇るハイランドが広がっている。自然の雄大さと美しさを一望できるこの眺めは，スコットランドにおいても城からの眺めに次ぐものであり，ゲデス教授の奮闘により可能になった学術的な調査を象徴している。1887 年，彼はここに大学ホールを設立した。

彼の社会活動は，1886 年に夏期講座を組織したことに始まったようだ。この年には，わずかに海浜動物学と庭園植物学の講座が設けられただけであったが，翌年には進化論の講座が加わり，続く三年間にエジンバラ近くのグラントン・マリン・ステイション (Granton Marine Station) で授業が行われ，受講者も徐々に増え，植物学と動物学が主要な科目であり続けた。1889 年と 1890 年に，進化論を生物学的研究のみならず社会的な研究にまで適用した社会進化論の講座がゲデスによって受け持たれ，中心的な講座となった。1891 年にはたいていの授業がエジンバラの学生用居住設備を備えた建物の近辺で行われた。これをもってゲデス教授は大学ホールの計画を開始した。1893 年から 1895 年まで講習はトレイニング・カレッジ (Training College) のノーマル・スクール (Normal School) で行われ，市議会から交付金を受けて運営されていた。特に哲学や社会学，歴史学，地理学などの講座数は増えつづけた。講座には大英帝国や大陸から著名な教育者たちが参加し，その中にはダブリンの J・K・イングラム (J. K. Ingram) と A・C・ハッドン (A. C. Haddon)，ブリストルのロイド・モーガン (Lloyd Morgan)，シカゴのリチャード・G・モールトン (Richard G. Moulton)，フライブルクのアーンスト・グロス (Ernst Grosse)，ベルギーのエリゼ・ルクリュ (Elisee Reclus)，パリのエドモン・ドモラン (Edmond Demolins) とポール・デジャルダン (Paul Desjardins)，グラスゴーのヘンリー・ダイアー (Henry Dyer)，イエナのライン教授 (Professor Rein)，ミシガン州アナーバーのウェンリー教授 (Professor Wenley) らがいた。プログラムは例えばこのようなものであった。

A　一般講座

9-10　現代の社会進化　20 講義　ゲデス教授
10-11　科学の歴史と原理　20 講義

B　教育・社会科学・人間性部門

10-11

11-12　近代史　20 講義
　　ヴィクター・ブランフォード氏

12-1　（前半）社会科学［仏語］10 講義
　　ドモラン氏
　（後半）現代フランスにおける道徳の再生［仏語］10 講義
　　デジャルダン氏

B　自然科学部門

10-11（前半）比較心理学　10 講義
　　ロイド・モーガン教授
　（後半）衛生学　10 講義
　　ルイス・アーヴィン博士

11-12　生物学　20 講義
　　J・アーサー・トムソン氏
　　およびノーマン・ワイルド氏

2-4	実践経済学（ゲデス教授） 歴史（ブランフォード氏） 教育（ニューコーム女史） 演説法　10演習　エテカ・グリン女史	2-4	実践植物学（フィールドワーク含む）20回 ロバート・ターンブル氏 地理学　実地調査10回 ワイルド氏（前半） 実践動物学（マリンステーションにて）20回 トムソン氏
8-9	ミュージカル・リサイタル　週1回 ケネディ・フレイザー夫人とゲデス夫人 文学リサイタル　エテカ・グリン女史	8-9	エジンバラと近郊　地域調査　20講義

カリキュラムは拡大され，他のどこのものよりも興味深い綜合が見られるようになった。この年，近代言語の研究を重視したことで，カリキュラムの性質が少し変化した。翌夏，旧来の手法が再び採用され，近代言語が加わった。教育の目的は，ゲデス教授の言葉から読み取ることができる。

「具体から抽象へ，感覚から知力へと思考するというお馴染みの考えを始めとして，各研究主題における試みは以下のものである。①深い印象によって学生の知性を洗練させること。②より高度な文献を学生に紹介すること。③観察や解釈の蓄積を要約し整理し，より明確に思考するための手段を学生に与えること。したがって①実証，実験や，実地見学を重視し，②複数の主題に関してセミナーを導入し（これは書物の世界や文献調査へのガイダンスとあわせてドイツの大学の著しい長所である），③地図やグラフなどの視覚的な手段を多く用いる。

学生たちは，確かに観察者としては洗練されている。しかし，彼らは情報の貯蔵庫なのではなく，自立した思考を生み出す者であるべきなのだ。したがって他の大学とは違って，悪評高い試験の類はここでは全く行われていない。進度を測定するより刺激的で満足のいく方法は，学生の教育に学生自身を参加させることである。つまり，まず学生の研究対象を豊かで体系的にし，次に学生の最良の研究成果を共有し，そして最後に教師との共同作業を拡充することに注意を向けた。

さまざまな教育の作法から題材へといたるなかで，①充分に準備された一連の特別講座を提供するだけでなく，②各講座を平等に扱い，③各講座を，より大枠の全体と結びつけることを試みている。したがってすべての学生を対象にした一般講座が設けられ，そこでは特に文明化の歴史，科学の歴史的発展，両者の一般的な原理と相互の関係などが講じられている。現在の要綱が実際に目指しているのは，理論においては知識を組織化し，実践においては教育課程をさらに合理的に編成することである。

このような講座のあり方や手法のなかに，科学にたずさわる人の真っ当な主張を見いだすことができる。というのも学者やヒューマニストたちは，自然科学の進歩がいかほどのものであれ，人間に関する研究というものは最も崇高でなければならないと主張するが，このような主張もまた，ここでは認知されている。たとえば，社会科学が生物学よりも上位に置かれていることは特徴的である」

それゆえ，ゲデス教授の仕事には，綜合的研究だけでなく，論理的には協働 (correlation) が含まれていた。

1887年5月，最初の大学ホールの中に三つの小さなフラットが七人の学生にあてがわれた。スコットランドの大学には寮がなかったので，このような英断が下された。学生たちが入居できる独立した建物が建設されるまで，フラットが利用され，学生の数は増えつづけた。年を経るごとに学生の数はますます増えつづけ，百を越す学生や芸術家，文学をはじめとした専門家たちのために住居を提供するだけ

でなく，エジンバラ旧市街を再建するための準備が次第になされていた。40 もの家屋や小道を改善するために 50 万ドル以上かかったが，結果としてこの歴史的な地区はその有機的な性質を変えることなく衛生的にも美的にも改善された。これらの事業は，贈与や利子なしの貸付金によって賄われたのではない。しかし，ゲデス教授の土地に投資された資本に対しては平均して 4.5% という手ごろな収益が一律に支払われた。1896 年，ゲデス教授の導きにより市民と大学の協会 (Town and Gown Association) が結成され，大学の大枠が整った。ゲデス教授が唱える教育哲学が研究と活動の連結性の必要を含意するのだとすれば，それは同時に活動の結果として研究が発展するということをも意味するだろう。このような努力はアウトルック・タワー (Outlook Tower) において目に見える形で具体的に現われている。

アウトルック・タワーは，もともとはよく知られた展望台であった。ここには，カメラ・オブスキュラ (camera obscura) が備えられており，そこからは城からの眺めをも凌ぐすばらしい眺めが得られた。このカメラ・オブスキュラは，純粋に商業的な目的によって建設されたものだったが，いまやこの科学研究所の頂点に位置するものである。この塔にのぼれば百科事典が，そして塔を降りれば実験室があった。

既知のものから未知のものへ，近いものから遠いものへ進むという科学的手法に基づいて築かれたとはいえ，塔にのぼりはじめるとまず最初に，この手法が生みだす最後の製品つまり世界全体のグラフィックな展示を目にすることになる。この科学的手法に論理的に従うならば塔の頂上から見学をはじめなければならないのだが，われわれはのぼる途中でその帰結を目にしてしまう。ゲデスは言っている。

「教育だけでなく出版もエジンバラの知的伝統である。抽象的な哲学だけでなく，具体的な百科事典（ブリタニカやシャンバーなど）もこの伝統を形作っている。アトラス，地図，ガゼットなども含まれるだろう。ここでの地域調査は驚くほどに豊かでかつ完成されているが，同時に世界調査にも手をのばしている。またこの知的伝統は，過去のものに対してかつてないほどに広く関心を向けている。これらのことは，スコットランド人がイングランドや大英帝国，アメリカ，そして世界中へと広く羽ばたいていることの証拠でもある。地域的なアウトルック・タワーは，それ自体が地域の産物である。もっとも，百科事典の原理がどこでも活用されているように，その原理は他の地域にも容易に適用可能なものなのだが」

したがって，ここでは印刷物としての百科事典ではなく，グラフィックな形式の百科事典つまり塔のことを話そう。そこでは単にデータが組織化されているだけでなく，事実と事実が相互に関連している。最下部では，アリストテレスやベーコンからコントやスペンサーにいたる芸術および科学 (art and science) の成果が見られる。ゲデス教授にとってはルプレや，生の真実の相関を試みた者たちとならんで，コントが知的な先祖の一人であった。ここは，芸術と科学のすべての学生を惹きつける魅力に満ちていて，特に上のフロアーは社会学者の興味を惹きつけた。続くフロアーでは，図表，平面図，写真やスケッチの形で，ヨーロッパ全体，大英帝国，スコットランド，エジンバラや近隣の国々などが紹介されている。

カメラ・オブスキュラがあるタワーの頂上を詳細に観察してみる方が，より有益だろう。

この道具は，社会学者にとっては天体観測台と顕微用の実験室の両者の利点を併せもつものである。この二つは，似通ったものとも，かけ離れたものとも見ることができる。卓上には，裸眼で見るよりも広大な視覚とともに，光の不調和な光線のいくつかを取り除くことによって，より美しい景色が映し出される。人は，同時に科学者の目と芸術家の目で見ることができる。カメラ・オブスキュラの偉大な目

的とは，観察の正しい方法を教え，美的な楽しみと芸術的な鑑賞を融合することである。観察は，この融合とともにはじまる。この融合は，すべての分析が立ちもどってくるような綜合的な態度とともに，あらゆる科学的な分析が始まるまえに習慣的でなければならない。この小さな建物では，光は上方からしか来ない。そこから反射によって建物の外の映像が，白い丸テーブルの上に投射され，われわれはエジンバラ旧市街のことを知ることができる。テーブルを回転させれば塔の西にある一続きの荘厳な建物を見ることができる。これは市民と学者の協会の所有である。その向こうには，遊歩道や城，新市街の一部などが，旧市街への昔の経由地であるグラスマーケットと同様に並んでいる。南にテーブルを回転させると，ヘリオット病院，グレイフリアーズ協会，ロイヤル診療所，野原，公営のゴルフ場，ペントランドなどが見える。東を見ると，この立地の素晴らしさに気づくだろう。塔は，旧市街の大通りの北側に位置している。聖ジャイルズ教会，議事堂，そして数え切れない歴史的な記念碑，ホリールード宮殿，ソールズベリークレイグ，アルチュールシートなどが並び，エジンバラの歴史のほとんどがこの通り沿いの古い住居のなかで書かれてきた。北に向かっては，プリンスズ・ガーデンズやプリンスズ・ストリート，公共の機関であるマウンド・カールトンヒルなどを含むユニークなパノラマが広がる。エジンバラ新市街とライスの港の向こうにはフォース湾が広がり，天気のよい日にはハイランドが見える。

「地図のごとくたどれば，
洗練された美しい風景がひろがっている
ペントランドの勾配は緑をなし
海の潮流は空の色
ダニーディン・ブルーの南風を受けながら，
アーサーズシートが輝いている
遠くオリエントラマーの娘たちのなかにいても，
北バーウィック・ローが緑のコーンをともない，
海の真中で低音が響くのがわかる」

このような物理的環境に居合わせると，社会学者は近代的な生活の多様さを目にすることができる。たとえば足元には，荘厳な要塞の影の下でスコットランド最悪のスラム街と並んで，かつて忠誠心のよりどころであった教会および政治的な権威の場所が見られる。また，プリンスズ・ガーデンズにおける鉄道，プリンスズ・ストリートの店舗，フォース湾にかかる橋などの近代的で商業的な活動から高台の素朴な牧羊までが見え，同様にしてギャラリー，博物館，展望台から庭園，病院にいたるまでには，近代の芸術と科学の記念碑を見ることができる。社会状況と地形の関係に否応なく関心が向けられる。このような移りゆく光景を見ることで正確に物事を観察することを学ぶと，世界の地理学や社会制度を学ぶための手段を身につけることができる。

カメラ・オブスキュラから，塔の屋根へと降りると，今度は人工の手段を借りずに景色を堪能することができる。しかも先ほどはカメラ・オブスキュラからパノラマを眺めていただけに，今度はより深い洞察をもって眺めることができる。塔の喫茶室で紅茶を一杯飲み景気づけしたあと，エジンバラに捧げられた物語を手に階段を降りる。ここには，われわれが目撃してきた移り行くページェントの永遠の綜合がある。エジンバラ市の模型は現在の建造物のかつての姿を思い出させ，チャートや絵によって，最古の城壁から旧市街の再編，新市街の拡張といったこの街の歴史をたどることができる。実際，このフロアでわれわれは，この塔は単に科学的なだけでなく，実践的であるという根拠を見出す。ここではゲ

デス教授と彼の同僚によって担われた旧市街の再生計画が明らかになる。彼の言葉によれば,「考古学と公衆衛生への関心, 美学と金融への関心, 住宅問題, アカデミックなコミュニティが大学という形態を取りはじめたことへの関心などが, ここでは実際的な活動において調和している」

以下では, スコットランドの話に移ろう。床には, 羅針盤の方位にあわせて巨大な地図があり, いま自分がどこにいるのかが容易にわかる。壁にもスコットランドの地形や歴史, 社会状況などがグラフィックに再現されている。ハイランドにおける古代人の暮らしや, フォース湾ならびクライド湾の船の, 商業および海軍による管理などについても示されている。われわれアメリカ人がスコットランドから輸入した人気スポーツに関して, 地形の重要さを説いたゲデス教授による一節には, 社会学という学問の可能性が見られる。

「スコットランドについては, あらゆる人がその人なりの考えを持っていることだろう。エジンバラのロマンティックな面について, あるいはグラスゴーの産業集中の度合いや世界的な商業について, 多かれ少なかれ耳にしてきたのではないだろうか。セント・アンドリュースのゴルフやハイランドのスポーツ, 西海岸のヨットのことも耳にしたかもしれない。野原や山地での狩りや, 入江での船遊びが思い浮かぶかもしれない。そこでセント・アンドリュースとゴルフについて考えてみるならば, それらははなぜここまで発展したのだろうか。この小さな町の評判はどうやって説明すればよいのだろうか。この特徴的なゲームがなぜ, オックスフォードやケンブリッジのボートよりも広範に名声を博すようになったのだろう。このゴルフクラブがなぜ「高貴で由緒ある」ものになり, メリルボーン・クリケット・クラブを凌ぐ権威を与えられたのだろう。なぜそうなったのか。確かにここには, 周辺部に牧草をたくわえたリンクスと呼ばれる砂丘がある。しかしこのリンクスはスコットランドおよびイングランドの東海岸沿いに横たわり, 北フランスからオランダやプロイセンの海岸を沿って, フィンランドやバルト海の最奥部まで広大な範囲にひろがっている。まず最初に考えなければならないのは, なぜこのような土壌でゴルフをするようになったのかということである。まずは風に吹かれて飛び散る砂をご覧なさい。そして青色のたくましいハマムギをご覧なさい。ハマムギは地を這う長い茎をもち, 砂の中に強靭な根をはっている。この植物がなければ砂地は内陸部へと無限にひろがって, 田畑や教会区のすべてを破壊しつくしていたことだろう。(ちなみにそのようなことは実際に起こっている)。この砂丘に風が吹きつけ, ゲームの主要な障害物である「バンカー」となる大小の穴をそこかしこに作り上げるのである。しかし砂丘の表面が整っているところでは, 羊が食べる立派な牧草がすぐに姿をあらわし, 羊や羊飼いがやって来る。周辺部の牧草地は狭いため, 牧羊を文明化しなければならない。しかしここ西ヨーロッパでは, このような牧草地は半端なものに過ぎない。移住性の牧羊一家や家父長的家族などあり得ないのだ。放牧はもっとも簡単なものにとどまっており, 通常の農業集団とは別段変わりはない。東洋のように果てしなく沈思黙考する代わりに, ここでは行動することが必要となる。羊飼いの羊だけが牧草地を独占しているわけではない。乾ききった土っぽい土壌と芝生は, ウサギにとっても巣穴や牧草地として好都合である。羊飼いは時折り, ウサギの巣穴に杖で白い石をいれる。石を穴に入れては, また出して, 次の穴にいれる。羊飼いが気晴らしでおこなったこの遊びが, ゴルフというゲームの始まりなのである。

これまでゴルフの起源や, ゴルフとリンクスの関係について話してきた。しかしなぜ, とりわけセント・アンドリュースなのだろうか。ここは辺鄙な大学の町で, 山も川もなければ運動競技用の資源になるものもない。資源と言えば海がもたらすものか, 広大な野原でのゴルフくらいのものである。学生たちは, そもそもは彼ら自身がたいてい羊飼いであるのだが, 自然とゴルフをやりはじめ, 羊飼いたちが

気晴らしとして行うよりも熟練するようになり，さらに創意に富み手先の器用な町の住人が「クラブ」や「ボール」を改良するようになる。老いも若きもゲームに興じ，ついには熱狂してゲームのことを書きしるす。やがては，ジャーナリストや政治家によってロンドンから各地へとあらゆる方法で広められ，セント・アンドリュースの人びとは多かれ少なかれバルフォア気どりかアンドリュー・ラング気どりになったのである」(The Co-operative Wholesale Societies' Annual, 1895,「経済学と市民権の教育，およびそこにおける歴史学と地理学の占める場所」485-529 ページ)

塔のスコットランドの部門をあとにして，その下のフロアまで行くとそこには大英帝国と合衆国用の部屋がある。ここには，英語圏の初期の記録があり，このプロジェクトがいかに包括的であるかが見て取れる。その下のフロアはヨーロッパ部門である。ここを訪れる人は，キプロスでのゲデス教授の近年の実験記録のなかに科学と実践の結合を見出すであろう。彼によればキプロスは「地理的，歴史的，人種的，社会的な小宇宙である。そして，旧来の世界がかかえる発展や問題などの多くを一度に統合するような，特殊な地域である。ヨーロッパとアジアを，あるいは両者をエジプト経由でアフリカと結びつけている」。ここが，アウトルックタワーの典型的な場所である。ゲデス教授は単にキプロスの視覚的な特質をここに集め，それを授業や出版のために活用しただけではなく，島の発展のために社会を組織したのである。それは恩恵や保護や，強制的な協調のためではなく，農土の発展や森林の再編をもたらすための手段であった。

世界全体に捧げられたフロアもある。ここは 1900 年のパリ万博のために準備されたレクルス教授の「大いなる地球」計画の成就をもって完成する予定である。レクルス教授もゲデス教授もひるむことなく，地球と塔に関する各々の相補的な計画を完璧な地理的展示へと融合させるべく精進している。もちろんこれらの展示は，パリや大英帝国やアメリカでは，状況に応じて例えばより小さな地域博物館や，別の都市のアウトルックタワーへ，あるいは大学や学校における地理学教育に見合う小規模なものへと修正されるであろう。

アウトルック・タワーはエジンバラの夏期講座の聴講生のための博物館や研究室だけでなく，地理学の中心的な学校であり，市民と大学の協会であり，旧エジンバラ芸術学校であり，出版局でもあった。この出版局を通して「パトリック・ゲデスと彼の仲間たち」は，文学や芸術におけるケルトの復興に寄与するいくつかの美しい本を出版した。その素晴らしさは，これらの出版物の一つである『エバー・グリーン』のなかで説明されている。

「凍りついた文化のアイス・パック（エジンバラ）からは先進的な産業が，そして西欧における産業の地獄（グラスゴー）からは芸術的な生命が再びあらわれてきた。エジンバラでは建築が再建された。過去十二年間の成果は，総合すればイングランドや大陸の都市に見劣りするものではない。それどころかいくつかの建築物は，それらを凌ぎ，少なくとも一つ（エジンバラの高貴な大学ホール）は，ルネサンスの最盛期のものに匹敵する。組織的であるだけに気づき難いのだが，現在も進行中の旧市街の再生事業は，この街の建築が優れていることの何よりの印である。聖堂の開設や，街路の再建，城門や議事堂の再建などが行われている。古い路地や，ホリールード宮から城まで続く小路はゆるやかではあるが確実に変化している。かつては，あるいは今でもヨーロッパにおける物質的および人間的な破滅と困窮がもっとも密ではげしく混ぜ合わされた場所の真っ只中で，芸術が活気づき，衛生施設が開設され，貧富を問わず労働者や学生のための保養施設までもが設けられている。ここにはかすかではあるが，日々進む民主主義と文化の再統合がみられる。議会的で抽象的な意味ではなく，市民的で具体的な意味において」

エジンバラ芸術学校は，ケルトのデザインを復興すると同時に新たなケルトの芸術家を発掘してきたが，彼らの活動は外来者には思いもよらないほどパトリック・ゲデス教授の着想の恩恵をこうむっている。彼の住居や大学ホールやキャッスルヒルのこの上ない芸術的進歩であろうと，旧市街の改善された建築であろうと，われわれはこの教授の手をいたるところに見出すことができる。キプロスの救済や，ダンディーにおける植物学の講義，エジンバラの再建，書物の印刷，芸術に関する講義，アウトルック・タワーの科学的な収集品など，これらすべてが彼の人格の中で調和しているのである。彼にとっては綜合が現代科学の主要な機能である。彼が言うには「われわれの研究は，もし歴史的な視点を失えば全てを失うであろう。しかし，われわれは現在からはじめなければならず，過去は現在を見ることによって見えてくる。また，われわれの研究は，地理的な視点を失えば全てを失うであろう。しかし，われわれはわれわれの玄関から出発しなければならない。科学的でなければ意味がないが，芸術から始めなければならないのだ！」

アウトルック・タワーは，学校でもあり，博物館でもあり，仕事場でもあり，展望台でもある。それは，世界で最初の社会学的実験室と呼ぶべきものである。